

友ありて



このところ友人の訪薩が続いている。新幹線の開通や珍しい大雪などが、全国版のニュースになって放映されたり、いまや清酒を抜かんとしている焼酎ブームなど、東京でも鹿児島を身近に感じて来ているらしい。

昨年十一月には、四十五年来の友人I夫妻の初めての訪薩があつた。夫人のH子さんとは、まだ幼かつた子供達を団地の砂場で遊ばせている間に仲良しになつて、それ以来の友人である。お互い夫が金融関係の会社勤めだったので夫婦のお付き合ひとなつた。しかし転勤の多い時期に別れたままで、定年になつた今やつ

と夫婦揃つての再会となつた。

Iさんが、西ドイツ支店長になつた折私は一週間デュッセルドルフの自宅にお邪魔したことがあつた。アムステルダムやフランクフルトを案内してもらつたり、ライン下りの帰りにボン、ケルンで汽車を下りてベートーベンの生家や教会を駆け足で回つたりした。今回のI夫妻は、鹿児島で銀行時代のOBとゴルフのコンペがあり、そのあと屋久島まで足を伸ばし、帰つて指宿泊だという。今度は私の番だと思つた。年金暮らしの今となつては何分の一のことも出来ないけれど。当日、七時前に夫と指宿を目指す。H子さんには、私が鹿児島に移るまでに、何回か会つていたが、Iさんとはドイツ以来の、二十年振りだ。しかし髪が白くなつたくらいでそんなに変わつていなか

った。変わったのは我が夫で、体重はなんと20キロも増え、髪はすっかり薄くなり、今では自分で剃って、まさに僧形である。昔、お正月にIさん宅でご馳走になり、酔った夫はIさんに背負われて帰宅したことがあった。今の夫では流石スポーツマンのIさんでも押し潰されてしまっただろう。しかし顔を合わせると気分はアツという間に昔に戻っていた。

長崎鼻、池田湖、知覧と巡って市内に戻ったが、天皇がいらっしやる日ということで、混雑を避けて、仙巖園と南洲神社だけ回った後、一緒に宿泊予定のいむた池に向かった。翌日は「山北」である宮之城、入来を案内した後、空港まで見送った。車中、インターネットに凝っているというIさんの巧みな話に、どうやら夫もその気になったらしい。

正月明け、若い人と一杯やっつてる夫に、電話があった。

「そうか。いつ来るんだ。大牟田から車なら3号線を来た方が簡単だ」

大牟田と聞いて、東京の業界紙の編集長Tさんとすぐ分かった。故郷が大牟田なのだ。

「何だ。五人で来るのか。いいよ泊まれるよ」

へーっ。五人ですか。

夫の話によると、彼は大阪の友人と汽車で

帰り、弟さんと高校時代の友人二人を連れて車で五日後に来るのだそうだ。

Tさんが来る。私は訳もなく嬉しくなった。彼とも三十年ほどのお付き合いである。

在京中は、月一回、銀座、新橋あたりで飲み会をやっていた。Tさんの誌上で夫

と対談をした先生方と「キザ会」を結成し、幹事がTさんで、私もメンバーの一人になっていた。

前日から私は、五人分の寝具を日に当たたり、食料を仕入れたりいそいそと準備した。当日になった。車一台で来るのかと思つたら、ワゴン車で、乗つていたのは4人だけだった。一人風邪で来れなかつたという。そのワゴン車は7〜8人乗れるとのこと。それでは、明日はそれ一台で皆でドライブだ。

夜の主役は鹿児島島の焼酎である。皆は以前からの知己のように忌憚なく歓談した。彼等は座敷に枕を並べ就学旅行生のように寝た。翌日は素晴らしい快晴となり、気温も高く一月といつのに、まるで春のようだった。

知覧。団塊の世代の彼等には、特攻記

念館

を見てもジンと来るものは何も無いようだ。

その後で回つた池田湖は、菜の花が真っ盛りで黄色も瑞々しかった。枚聞神社の方へ車を走らせて行くと、子供たちがぞろぞろと、走るでもなく歩くでもなく移動している。聞くと「菜の花マラソン」ということだった。彼等の年代では神社よりもと、桜島に渡ることにした。ぐるりと一周すると、陽はまさに

に海に入らんとして、金波銀波が揺れていた。夕食はTさんが腕を振るって、簡単美味のものを作るといふ。彼は帰りにスーパーで材料を仕入れていた。思うに、彼は道を誤つたようだ。売れっ子のグッチ某にも負けないオリジナルな美味しいものを彼は作るのだ。

昼間、大阪の友人は、我が家の少し凹

んだ息子譲りのレガシーを見ていた。お酒の勢いで、私に軽のハイブリッドカーをプレゼントしようと言う。後で若い人に聞くと、軽のハイブリッドカーなんてないのだそうだ。

まあ夢でもそんなこと言ってくれる人がいることは本当に嬉しい。

昨日、ハイブリッドカーならぬ「辛子めんたいこ」が彼から届いた。

